

魯肅伝上 目次

・ 第一回 魯謨	2	・ 第二回 孫堅	9
・ 第三回 黄巾	16	・ 第四回 下邳	24
・ 第五回 子敬	30	・ 第六回 闕宣	38
・ 第七回 陳登	44	・ 第八回 子揚	51
・ 第九回 曹躍	59	・ 第十回 劉意	64
・ 第十一回 脱出	73	・ 第十二回 出資	80
・ 第十三回 孫權	87	・ 第十四回 帰郷	92
・ 第十五回 再建	97	・ 第十六回 先物	104
・ 第十七回 国債	111	・ 第十八回 薨去	116
・ 第十九回 陶謙	122	・ 第二十回 寿春	128
・ 第二十一回 蟻鼻	135	・ 第二十二回 曹操	142
・ 第二十三回 鍊官	150	・ 第二十四回 閻象	159
・ 第二十五回 狂児	168	・ 第二十六回 周瑜	176
・ 第二十七回 東渡	182	・ 第二十八回 孫權	189
・ 第二十九回 帝王	196	・ 卷末注釈	203

登場人物紹介

- ・ 魯肅ろしゆく 本作の主人公。後漢時代の後期（二世紀後半）、徐州の下邳国の東城県に、豪族の子として生まれた。配下の民の生活を安定させることを素志とする。経営や投資を学んでおり、父を超える才能の片鱗を窺わせる。
- ・ 魯謨ろしゆく 魯肅の父。東城県の中小豪族。先祖以来、後漢王朝に服従せず、県城の外で独立的な経営をしてきた。投資の才覚を一族の強みとし、繁栄を築いている。
- ・ 孫堅そんけん 揚州の呉郡の富春県のひと。海賊や反乱を平定した功績により、下邳県の次官を務める。黄巾の乱が起ると、荊州の南陽郡に転任した。
- ・ 孫策そんさく 孫堅の長子。母は、呉郡の呉氏。
- ・ 孫權そんけん 孫堅の次子。孫策の同母弟。
- ・ 曹操そうそう 豫州の沛国のひと。下邳国の相（長官）。徴税権を利用し、不服従の豪族に圧力をかける。養父は、宮廷で最高位を極めた、宦官（去勢された男子）。
- ・ 陳登ちんとう 曹躍の従子。黄巾の乱が起ると、騎都尉となつて活躍した。後漢王朝が求心力を失うと、兗州に割拠した。あざなは元龍。下邳国の淮浦県のひと。祖父の兄が臣下で最高位の三公となり、在地の名家として声望を有する。才能豊かな食客を集めている。
- ・ 闕宣けっせん 下邳国のひと。魯氏と取引がある中堅商人。官職の売買制度を知り、ひと儲けを企む。

・子揚 陳登の食客。情報の収集や分析に長けている。本名を隠して活動しているが、その血筋は……。

・劉意 下邳国の王。老齡の皇族。

・陶謙 揚州の丹陽郡のひとつ。徐州に割拠した。

・袁術 豫州の汝南郡のひとつ。四世代にわたり三公を輩出し、最も繁栄した官僚家の出身。荊州の南陽郡に滞在した後、揚

州の寿春に移つて最大級の勢力を形成する。

・劉勲 琅邪郡のひとつ。故郷を離れ、袁術に仕える。

・閻象 袁術の配下（主簿）。経済政策にも関与している。

・周瑜 廬江郡のひとつ。三公の家柄で、揚州の輿論を握っている。

袁術に仕えており、魯肅に会いにくる。

・諸葛瑾 琅邪郡のひとつ。故郷を離れ、孫権の賓客となる。諸葛亮（あざなは孔明）という弟がいる。

第一回 魯謨

魯肅は、字を子敬という。臨淮郡の東城県の人である（『三国志』卷五十四 魯肅伝）。

生年は、史料に記載がないが、魯肅伝に、

「（魯）肅は、年四十六で、建安二十二年に卒した」と、死亡記事がある。

建安二十二年は、概ね西暦二一七年にあたるから、生年は、熹平

元（一七二）年と考えることができる。

熹平元年は、どのような年であったか。

後漢王朝は、靈帝が即位して五年目。

『後漢書』本紀八 靈帝紀によると、十一月、会稽郡の許氏が、長江の南側、海沿いの地域で、かつて楚の国があった。

皇帝は、排他的な地位で、天下に一人しか存在しない、とされている。「皇帝」を称するのは、王朝への反逆であり、独立宣言ともいえる。「王」は、皇帝の一族の地位だから、これを名乗るのも、同様に反逆行為である。

——長江の南で、独自の王朝建設を志向する。

魯肅が生まれたのは、そんな動きがあった年であった。

会稽許氏は、揚州刺史と丹陽太守に討伐された。刺史や太守というのは、地域を統治する長官である。討伐軍のなかに、まだ地位は低い、ひとりの勇敢な武人がいた。

孫堅

である。

孫堅は、揚州呉郡の富春県のひと。卷四十六 孫堅伝では、兵法家である、孫武（孫子）の後裔であろう、と推測されている。

年号が、熹平から光和に改められた。光和六（一八三）年、魯肅は十二歳である。

東城魯氏は、東城のそとに聚落を営む豪族である。倉庫を建て

蓄財し、壕を巡らせて守っている。家族と、私的に使役している民とを合わせると、千人程度が生活していた。壕のなかに百人、そとに九百人が住んでいる。民は農業や商業を営み、収穫物や利潤を魯氏に納めていた。魯氏はそれらの財を預って、事業にまわしたり、民に再分配したりした。

環濠の中心部に、魯氏の邸宅があった。壕の周囲に、物見のための台を設け、見張りを立てていた。

秋の初め頃、「役人が接近中です。三名です。馬は一頭。武装は、しておりません」と報告が入った。

「出迎えてやれ」

家長の魯諤が命じた。彼は、魯肅の父である。武装した兵五名に橋を渡らせ、壕のそとに立たせた。

「橋を上げよ」

魯諤が命じた。木製の橋は、軋みながら垂直に立った。壕の内側に支点があり、外側に向けて架橋する構造である。

（役人だつて？）

魯肅は、様子が気になって、そわそわしていた。生まれてこの方、役人というものを見たことがない。

「お前も来い」

父に許されて、見張り台に登った。

「あ、到着しましたね」

役人が下馬した。

「見えておる。そんなに騒ぐな」

魯諤は、息子の肩に手を添えた。

「お、話が始まったみたいです」

興奮して、こまめに反応した。

代表者と思しき役人が、こちらの兵に、何かを訴えている。初めは穏やかだったが、怒鳴り声が混じり、身振りが大きくなった。内容は聞き取れないが、揉めているようだ。

大丈夫だろうか、と、魯肅は不安になった。役人は、王朝の手先である。「政治権力に逆らうな」と、祖母から教わった。祖母というのは、父の母である。

「父上、役人が食い下がっているようですが」

「まあ、見ていなさい」

余裕の表情で、魯諤があごを撫でている。

「うちの人間も、興奮しています……」

双方から、熱気がのぼる。「絶対に要求を通してやる」、という気迫が、遠目にも窺われる。

「あ、役人が帰ります」

魯肅が、身を乗り出した。

「決裂のようですね」

役人が騎乗し、馬首を返した。彼らの代表者は肩を落とし、左右の二名は、所作があらう。用件を、果たせなかったようだ。魯氏の兵は、役人を門前払いにした。

魯諤は台上に残り、一瞬も視線を切らさず、役人が帰った方角を見つめている。魯肅も、同じ方角を眺め、

「……彼らは、何をしに来たのですか」

と、質問した。

「物乞いだな」

「物乞い？」

魯肅は、理解しかねた。物乞いは、貧しい者が、憐れみを求める行為ではなかったか。役人の身なりは整い、馬を連れていた。とても貧しいとは思えない。

「彼らの要求は何ですか」

ふむ、と、父は呼吸をおいてから、「税を納めよ、と言つて来ている」と教えた。

「納税は、拒否できるものですか」

「できる」

こともなげに、父が答えた。

本当だろうか。

「納税の拒否は、国家に対する叛逆」

……と聞きましたが。恐る恐る、語尾を濁した。

「気になるか。そんなことが」

笑われた。

「納税したら、金はどうなる」

「国家のため、使われる……ではありませんか」

「はっは」

父が、腹を揺すった。

「国家を語るのか、お前は。われらに財政のことは、分からぬ。教えてやろう。納税したら、金がどうなるのか。答えは明白だ。わが魯氏の財産が減る。それ以上のことはない」

自家の財産ならば、分かる。帳簿がある。物心がついてから、最初に叩き込まれたのが、帳簿の読み方、付け方であった。

「よいか。財産を減らすべきではない。唯々諾々と、財物を巻き上げられてるなんて、容認できない」

「はい」

おとなしく頷いた。父の道理は、一見もつともだが、それでいいのか。祖母の教えと矛盾するように思えるが、災厄が降りかかることはないのか。

魯肅は、今日、官吏というものを初めて見た。しかもそれは、家の兵と、衝突する場面であった。子供に知らされていないだけで、同じようなことが、頻繁に起きているのか。それならば、なぜ魯氏は無事でいられるのか。うまく父に伝えることはできないが、罪悪感のようなものが、心を埋め尽くした。

* * *

もういいだろう、と父が判断し、二人は台から下りた。魯肅は、梯子を踏み外しそうになった。とつさに父が、衣を掴んでくれたから、落ちずに済んだ。

息子の悩みを、察知したのだろう、

「これを見なさい」

魯諤が、懐から、年号と金額が、羅列されたものを出した。

生まれる前の、建寧元年から始まっている。建寧期は、元年から四年まで。魯肅が生まれた熹平元年を通過して、熹平期は、元年から六年まで。つぎに、光和元年から五年まで。都合、十五年間の記録であった。

「これを見て、何に気づく」

「年々、金額が増えています」

「そうだ、と父が応じ、

「今上陛下が即位して以来の、年あたりの課税額。一目瞭然、ど
んどん要求が高くなっている」

「しかし、納めていないのでしょうか」

「納めるものか」
書かれている金額は、実際の支出ではない。しかし、記録だけは
残っていた。

「光和元年以降、金額が二倍以上になっています」

「よ衣着眼点だ」

ほめられて、魯肅は、顔を赤らめた。

五年前、光和元年から顕著に高額となり、前年比の伸び率も、格
段に上がっている。この調子では、さきほど役人が告げた金額が、
さらに高かったと推測できる。言い値で払っていたら、魯氏の財産
は、著しく減っていただろう。

魯肅は、光和期の数字をなぞりながら、

「なぜ加速度的に、増税が行われていると思う？」
と、息子に問題を出した。

「財政の悪化……ですか」

「また財政か」

一笑に付された。

「財政の数値は、公表されていない。王朝の収支どころか、郡国の
収支、県の収支すら、われらは知り得ない。知り得ない数値を、憶
測で語るほど、愚かなことはない」

「申し訳ありません」

「謝らなくてよい。経済や財産にまつわる教育は、家長の責務だか
ら。国家との付き合い方も、教えのなかに含まれる。代々、受け継
いできた知恵だ。私もまた、父から学んだ」

魯肅の父の父、すなわち祖父とは、会ったことがない。自分が生
まれる前に、亡くなっていた。敷地に廟があつて、祖先たちが、祭
つてあつた。

「……知恵ですか」

父の言葉を反芻した。

せつかくだから教えておこう、と父が言い、

「後代のため、財産を増やすこと。利殖こそ、家長の責務だ。子孫
のために美田を買わず、という考えもあるだろう。だが魯氏は、子
孫のために美田を買う。どんどん買い占める。金というものは、淋
しがりやだ。皆で戯れていたいから、一箇所に集まってくる。家
長が交替するたび、金を解散させていたら、また集めるのに、時間
がかかる。美田を掻き集め、親から子、子から孫へと受け継ぐ。こ
のようにして、家長は、利殖の義務を果たしてきた」

と、教えてくれた。

「利殖の義務」

「そう。私には、その義務がある。お前にもだ。肝に銘じよ」

「はい」

二人は、見つめあつた。

「家族を守るためにも、財産が必要だ。分かるな」

魯肅は、祖母や母の顔を思い浮かべた。

家族が、壕の内側に住んでいる。ときに厳しい祖母。惜しまずに
愛情を注いでくれる母。不自由のない暮らし……。それを裏つけて

いるのが、絶対的な財産である。

財産は、祖先が遺してくれた、経営手腕の賜物。

——次代を担うのは、自分なのだ。

使命感に、身が震えた。

ところで——と、父が、話題を戻した。

「光和元年以降、通知される税額が上がっている理由は、皇帝陛下が原因を作っている。陛下は……」

と、そこまで言ったとき、物見が、「東に、土煙どけんを確認しました。五十騎ほどと推定されます」と叫んだ。

「話は、あとだ」

魯謨の表情が、引き締まり、慌ててまた梯子を昇った。魯肅も、父を追った。

砂塵。

「へ、兵を百人、配置につけよ。防御態勢をとる」

百人は、動員できる最大の数である。

魯肅が知る限り、これほどの警戒がしかれたことはない。

「肅は、家のなかで隠れている」

「いやです。見たい。見届けたいのです」

「……」

父は、何か言いたげであったが、息子の瞳を直視し、「宜しい」と言った。「矢が飛んでくるかも知れぬ。見届けるとしても、身を隠して、板の隙間からだ。言いつけを守るか」

「守ります」

着物に隠れているが、父の足が、震えているようだ。

「行ってくる」

魯謨は梯子を使わず、垂らした縄をつたって台から降り、兵のなかに入っていった。

迎え撃つ態勢が整うまえに、接近を許してしまった。兵を召集するだけで、精一杯であった。

「速い」

魯肅は、舌をまいた。

高所にいるので、軍の動きがよく分かる。隊列を整然と保っており、静かに見えるが、移動は、神速であった。まだまだ遠くにいると思ったら、もう眼前にいたという印象である。

四方を見渡した。魯氏が養っている民は多いから、壕のなかに収まらず、ほとんどが外部に住んでいる。家々は戸を閉ざし、見渡す限り、無人になった。

「民の家が、襲撃されねばよいが……」

「風がやんだ。」

馬蹄と、鎧の擦れる音だけが聞こえる。

騎馬隊は、家々や畑に見向きもせず、まっすぐに壕の縁かへと到達した。

「狙いは……?」

敵軍の動きを、凝視した。

先頭にいる將軍は、赤い鎧をつけ、ひときわ、身体が大きい。彼が片腕を振った。集団が、一斉に向きを変えた。無言で、壕のまわりを回ってゆく。

「……こちらの防備を、値踏みするようだ」

ひざから力が抜け、へたりこんだ。巨大な獣に睨まれているような、圧迫感がある。

「なぜ、あのような軍が来た？」

魯肃は考えた。

——納税を拒否したから、討伐部隊が差し向けられた。

と、考えるしかなかった。

わが兵は百だが、歩兵が主体である。夜盗から、聚落や耕作地を守るための武力である。王朝の正規軍と、戦う実力はない。ましてや、あの騎馬隊は精強であろう。ほかの軍を見たことがないので比べられないが、本能的な懼れを感じる。

壕は、深さ、幅ともに、外敵を完全に防げるものではない。本格的な籠城戦など、想定されていない。

「父は、大丈夫だろうか」

魯氏の家長が、無謀な判断をするはずがない。では、降伏か。

みじめな想像が浮かぶが、すぐに打ち消した。自分が知らないだけで、過去に、このようなことがあったのかも知れない。

「いや、初めてだろうな……」

さっきの父の動揺ぶりは、尋常ではなかった。

魯肃は、一族の無事を祈った。

降伏したら、財産は没収されるだろう。少なくとも十五年間、納税を怠ってきた。十五年どころか、さらに昔から、滞納しているはずだ。

魯氏の創業が、何代前であったか、正確には知らない。しかし聚

落の繁栄ぶりを見ると、二代や三代ではないはずだ。脱税を、言わば、家訓として奉ってきた。

視線を、壕のなかに移した。

大量の倉庫。魯氏の財力の証明であるが、今となつては、罪過ざいごの証拠にも思えた。

「政府軍に屈服すれば……、脱税の罰則とか、滞納分の利子とか、それらしい理由を付けて、没収されるだろう」

没収されれば、一族が貧困に転落するだけでなく、一千の民も、行き場を失う。

「屈服してはいけませんが、戦っても勝ち目がない」

考えごとで、頭が爆発しそうになっていると、

「橋を降ろせ」

と、号令が聞こえ、がらがらと音を立てて、跳ね橋が、壕に架けられた。

橋の上を、ひとりの男——魯諤が、歩いてゆく。

父は、自首をする犯罪者にしか見えない。

「せめて死刑を免れるとよいが」

と、絶望したが、

「あれは？」

よく見ると、大刀を一本、父が携えている。

「降参ではないかも知れない」

先日、見せてもらった、宝玉が付いた刀。父は武芸をやらない。敵將と決闘し、刺し違えるとは思えなかった。賄賂として、差し出すつもりであろうか。

「……」

父が、敵方と言葉を交わしている。

しばらくしてから、こちらを見上げ、手招きした。

「私も？」

指で鼻をさし、確認した。父が、首を縦に振った。

夷三族、

という言葉が、頭をよぎった。反逆した一族が、皆殺しにされる刑罰である。誠意を示すため、子を伴おうというのか。

「すぐに参ります」

父をまね、縄をつたって飛び降りた。生きた心地がしない。高さの目測を誤り、足を挫いてしまった。

* * *

駆けつけると、細い橋の上で、騎馬隊の指揮官と、父が、二人きりで正対していた。

父は、護衛を連れていない。だが、相手の指揮官もまた、兵を連れていない。一対一の格闘になっても、絶対に負けない、という自信の表れであろうか。

「息子の魯肅どのだな」

指揮官も、刀を帯びていた。父が、慣れない帯刀したのは、対等の状況を作るためかも知れない。

「あ、はい」

「私は、下邳丞の孫堅です」

指揮官が、挨拶をした。丞は、県の副官である。下邳県の第二位

の立場である。

「なぜ下邳丞が、こんなところに」

魯肅が、率直な疑問を口にした。ここは、東城県ののだ。

「下邳相の指示です」

地名と官職について、説明が必要であろう。史書は、魯氏の本籍地を、臨淮郡の東城県とするが、後漢の後期、この地域は、

下邳国

と、呼称されていた。

国の政務長官が、相である。国名を冠して、下邳相という。下邳相には、東城県を管轄する権限がある。

孫堅の官歴は、全てが明らかなわけではない。

孫堅伝によると、会稽許氏を討伐した功績により、推薦されて、塩瀆丞となった。数年後、盱眙丞となり、やがて下邳丞となったという。この二年後、中平元（一八四）年、荊州に移ってゆくから、現時点で下邳丞であることは、ほぼ確実と思われる。同注引『江表伝』によると、三県を歴任し、各地の下級官僚や、民と関係を結び、人望を集めたという。

盱眙県、下邳県は、下邳国に属する。いま、県の副官として、下邳相と同じ城に役所を構えている。下邳相と接点を有したとしても不思議ではない。

本来は、相に、県の副官を動員する権限はない。しかし王朝が長く続けば、制度は緩むものである。

孫堅が、魯護父子を見据え、
「東城魯氏に告ぐ。脱税により、不当な蓄財をしていると、報告がありました。調査にきました」
と、毅然と告げた。

調査とは名ばかりで、要するに、強制徴収であろう。

——納税しない豪族は、武力で制圧すべし。

(至極まっとうな論理だ)

下邳相の思考は、子供の魯肅にも分かる。

父の気配を伺った。無、である。孫堅の言葉に、何の反応もしていない。

鎧をずらして、孫堅が胸元から、書状を出した。国家発行の文面が、読み上げられた。「百年以上にわたる、魯氏の脱税を、もう黙認できない」という。

……百年か。そんなにも長く。

魯肅は、絶望した。

だが——、書状が、読み終わられる否や、

「だ、脱税ですって？」

父が声を裏返した。

「下邳相も、孫堅どのも、勘違いをしている」

「えっ？」

孫堅が、虚を突かれ、目を丸くした。

「言い逃れは無用です」

「いやいや、お待ち下さい。お考え違いを、されては困ります」

魯肅も瞠目した。

(父は、論戦を挑むつもりだ)

軍勢の接近を知り、動揺したかに見えた魯護は、もう平静を取り戻している。

——単刀のみを帯び、身を晒したのは、これが狙いだっただか。
魯肅は、敬意と期待を込めて、父の次なる言葉を待った。

第二回 孫堅

父魯護は、下邳丞の孫堅に質問した。

「われら魯氏に、脱税の容疑がかかっているそうですね」

「容疑どころか——、一銭も納めていないでしょう」

「たしかに、納めていません。がっ、特殊な事情があるのです」

「事情とは？」

孫堅のこめかみに、血管が浮き出た。

魯肅は、心配して父を見上げた。強き相手を挑発して、なんの得があるのか。

「うちは、永年の免税を、王朝から認可されています」

「王朝から？」

孫堅の眉間に、しわが寄る。

「脱税のみならず、虚偽の証言までするか」

武人の手が、刀に近づいた。彼は、下邳相の指示で、税の取り立てにきているのである。免税の認可など、あるはずがない。

——詭弁は、状況を悪くするだけだ。

魯肅の歯が、かちかちと鳴った。しかし父は、正義は、われにあ

り、といった調子で宣言した。

「認可は、正式なものです。証拠文書もあります」

「ぬけぬけと」

鞘から、刃が覗いた。

「疑うならば、お目に掛けましょう」

父が、巻物を出した。

「古い布の小片です。紛失しないように、厚い絹布に貼り付け、保存しています」

厳かな手つきで、ひもをほどき、腕を突きだして示した。

——本当に証拠があるのか。

魯肅も、知らないことである。自分の立場も忘れ、孫堅の側にまわり、文面をのぞいた。

戦功の恩賞として、百錢を賜う。

この百錢には、課税しないものとする。

「これが何か？」

孫堅は、分りかねている様子である。当然であろう。魯肅にもよく分らない。

「この署名を、ご存知ありませんか」

「読めないが……」

経年による劣化なのか、発行者の名を読み取れない。書法に堪能なひとでも、判読は難しいのではないか。

魯謨が、咳払いをした。

「世祖光武帝の署名です。戦乱のさなか、袖の端にこれを書いて、

下賜されました。光武帝の着物の一部なのです」

「光武帝？」

孫堅が目を剥いた。

光武帝は、名を劉秀という。

約五十年前、漢王朝を復興した人物であり、今日の皇帝の祖先である。皇帝が皇帝であることの根拠は、光武帝の子孫であるという血筋だけである。

光武帝の威光は、破格である。ちつぽけな切れ端のために、孫堅が、おのずと膝を付いていることから、明らかである。

「もう一度、拝見しても？」

「よく確かめて下さい」

魯謨が文書をわたした。

孫堅の手が、震えている。うつすら、涙ぐんでいる。

——光武帝にまつわる品を見ることができた、

ということが、彼を感動させているらしい。

「お分かりですか」

魯謨が微笑んだ。

「わが祖先は、まだ、小さな勢力だったころの光武帝に従軍し、直接、恩賞を賜ったそうです。皇帝に即位なさる前です。冀州で戦っていた時代と聞いています」

諸制度が整う前、各地を転戦していた草創期であれば、書状が素朴であることにも説明がつく。

——よくできた説明だが、証拠としては弱い、

と、魯肅は思った。

書状の真偽論争に持ち込めば、脱税の指摘をかわせるのかも知れない。いや、孫堅の様子を見るかぎり、偽書だと主張することはない。さそうだ。たまたま、孫堅が王朝に思い入れが強かったから、助かったようなものだ。

——しかし。

魯肅は、考え直す。

王朝に忠誠心が強ければ、いっそう、脱税が許せないであろう。形勢を逆転できたとは言えない。第一、免税されたのが百銭では、あまりにも少額である。

孫堅は文書を返却し、目尻をぬぐった。

「かりに、光武帝の許可があるとして——」

懸念どおり、孫堅は納得したわけではなかった。

「免税されたのは、百銭です。見たところ、魯氏の資産は、一万銭どころか、一億銭の価値もありそうですが」

孫堅が、壕のなかへの立ち入りを求めた。

「お待ち下さい」

父は立ち位置をずらし、進路を遮った。

「聚落の財産は、全部、課税の対象外のはずです」

「——だから」

対象外は、百銭だけであろう。

孫堅が言わんとすることは、父も承知しているようで、当然すぎる疑問に先回りした。

「わが家の財産は、全部、光武帝から頂戴した百銭を元手にして、増やしたものです。百銭の非課税を認めてもらえるならば、全部を

非課税として頂かないと、理屈が合いません」

「百銭が元手？」

孫堅の眼差しが、冷淡になった。

「大言は、通じませんよ。たったの百銭が、どうしてこのような巨大聚落に育つものか」

「疑っておられますか」

「無論」

「祖先は、ちよつとした商才があつたようで、一年かけて、百銭を百十銭に増やすことができました。一年で元手を一割、つまり十分の一ほど、増やせたわけです」

「ほお、それが？」

孫堅は、疑いの目つきである。

「二年目は、百十銭を元手にして、それを再び一割、増やす。すると、百二十一銭になりますね」

「うむ」

この孫堅という男も、商業の経験があるのだろう。父の話は、簡単ではないが、理解しているようだ。

「元手が増えれば、土地を買うこともできる。人を雇い、開墾することもできる。資金に余剰があれば、貸して利子を取ることだってできる。年によつては、商売に失敗したり、飢饉だってある。一割というのは、あくまで平均です。それも、かなり控えめに見積もった数字だと思つて下さい」

一年で一割を増やす。魯肅が吟味しても、非現実的な設定とは思われなかった。

魯肅は、相手が仮定を受け入れたことを見計らい、

「一年で一割。これを百五十年、重ねたらどうなりますか。計算の上では、およそ百六十万倍になります。百銭が、一億六千万銭になるのです」

「一億六千万銭……」

孫堅がうなった。

一億銭は、おそらく孫堅が、適当に言った数字であろう。魯氏の財産の大きさを表現し、脱税を詰るために使った金額である。しかし、偶然なのか、父に予め計算があつたのか、一億銭の説明が付いてしまった。控えめな仮定を設け、年に一割増やすだけでも、一億銭を超える。

「しかしだ」

孫堅とて、食い下がる。

「この王朝に生きる者は、戸単位、あるいは人単位に、納税するところが、定められている。農業、商業でつくった財産の一部を、上納しなければならぬ」

「そうですね」

と、魯諤は、いちど譲ってから、

「魯氏は、光武帝の恩寵によつて生かされ、数十人の親族がおられます。聚落の民は、私が養つておりますが、族的繁栄は、もとをたどれば、恩寵のおかげ。光武帝の思し召しがあれば、生を受けることも、子を為すことも出来なかつた」

「うむ」

光武帝の名を出せば、孫堅の眼光がやわらぐ。父は、それを見極めてから、

「魯氏にまつわる戸や人は、はじまりの百銭を元手に、生み出されたとと言っても、嘘にはなりません」

と、決めつけた。

父の熱弁は続く。

「聞けば、王朝創立に功績のあつた臣下には、特別の食邑が与えられ、子々孫々、生活が保証されたとか。私たちの祖先は、しがない計吏だったようですが、光武帝の事業の、末席に加わっていたことは事実です。どうか、考慮して頂けませんか」

父が平伏したので、魯肅も、慌てて頭をさげた。

「……」

孫堅が目を閉じた。

試し読みは、ここまでです。

通販は、楽史舎さまのBOOTH

<https://rakushisha.booth.pm/items/1089007>

もしくは、メールアドレス hirosato0906@yahoo.co.jpまで、ご連絡ください。

B5サイズ・206ページ・原稿用紙800枚相当・

税込2000円＋送料300円。

お申込から「週間以内に発送します」

いつか書きたい『三国志』<http://3gunzhi.net/>

佐藤大朗